

事件は現場で起きています



広酪事業推進課 係長 大島達夫

夏、真っ盛り!?

「夏場の飼養管理」が重要です!

乾物摂取に工夫を!!

■分娩を控えた牛に出来ること

今夏は朝・夕が例年よりは若干涼しいように感じますが、乳牛にとっては厳しい季節であることは間違いありません。昔から酪農経営では『1年1産』が目標とされますが、実際は高温に弱い乳用牛は夏場に受胎率が低下するため、春に出産した牛が夏に受胎できず涼しくなってきたらまとめて受胎しています。そのため、どうしても『1年1産』からズレてきます。また、秋に入って受胎した牛は次が夏分娩となるため、春や冬分娩に比べてどうしてもピーク乳量が低くなりがちで歓迎されていないのも事実です。

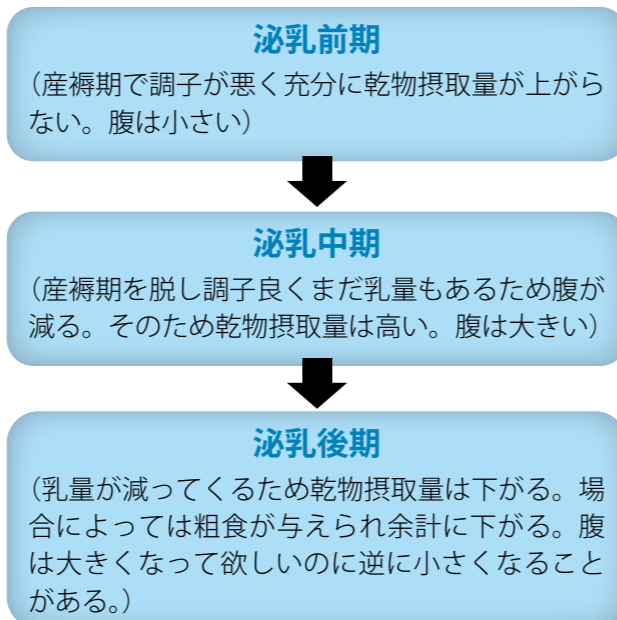
■後半の摂取量に注意しましょう

蛋白質、炭水化物、TDN、MP(吸収タンパク)、ME(吸収エネルギー)、バイパスタンパク質、バイパス油脂、バイパスアミノ酸、各種ビタミン類、各種ミネラル類等について色々な所見が出されており、それらを充足したり制限することは重要なことです。それ以外の注意点として乾物摂取量の維持、正確には『ガサ』を喰わせ続けることは非常に重要です。まず何よりも、大きな容積の胃袋(ルーメン)を維持して出産を迎えましょう。そのためには幾つか注意すべきことがあります。

■注意1 泌乳後半の牛に対しできるだけガサを食わせましょう。

冬場の厳冬期は出来るだけ荒い、又は堅い粗飼料の給与量を増やしておきます。乳牛が寒から粗飼料を積極的に摂取するこの時期は、通常期よりは太く堅い粗飼料を摂取させやすくなります。ここで給与した飼料は泌乳期後半の牛をターゲットにした粗飼料中心の給与ということもありほとんど乳量には反映しません。苦勞して無駄飯を食べさせるような印象を持たれると思います。しかも乳量の減る泌乳期後半の牛の内、係留飼

養牛は粗飼料を喰い込ませる工夫を必要とします。短くするのは手間ですが、とても有効な手法です。その際は、粉々にならないように注意して下さい。



飼養管理の工夫によりルーメンの容積(ガサを食べる能力)を大きくした乳用牛は、春からゴールデンウィークになって日中の気温が急に30℃を超えるようになっても安定して粗飼料を喰い込んでくれます。

■注意2 乳牛は「習慣の動物」。環境が変わるのに非常に敏感

分娩が近づいたからと言って急に分娩房に移動すると環境の変化により一気に食欲が落ちることがあります。環境の変化に関しては十分に時間的余裕を持って行って下さい。分娩房に移動したらぱったり食べなくなったり、逆に予定日まで余裕があったのにその夜産んでしまったという話をよく聞くことがあります。加えて、一般の搾乳牛舎の暑熱対策は万全なのに、乾乳牛の入っているパドックはあまり暑熱対策が講じられておらず、床や地面も又カルミ化していたりする場合があります。乾乳牛のカウコンフォートにはより万全を期して下さい。

■注意3 まさかの事故で発生するダメージに注意して下さい。

- 1) 高さが調整できるネックレールは高くするか取る。又はロープに変えておく。
繫留している鎖も事故に備えて、すぐ外せるタイプか切れるロープに変えておくことも重要です。
- 2) 糞尿溝を塞ぐ
いつもと場所が変わらないという利点もあり、繫いだまま分娩という牛舎も散見されますが、子牛が鼻から糞尿溝に落ちていて窒息死していたという例や、スリップした後肢がはまったという例もあります。少しの配慮で防げる事故が多くあります。
- 3) 牛の後部に柱がある場合、立ち坐りに支障が起きた場合に備え、クッション材で保護しておく。
ほんの2~3日立ち座りが悪かっただけであつという間に後肢の腿辺りや腰角付近にあたり傷ができていきます。
- 4) 分娩予定1週間くらい前からディッピングを行う。
分娩が近くなると乳頭口が甘くなり初乳の漏乳も見られるので、分娩予定1週間くらい前からディッピングを行いましょう。乾乳後も同様です。
- 5) スリップ事故に備え、牛床に滑り止めを引く。
安易なおが屑の使用は乳房炎の危険性を高めるのでその材質には注意して下さい。
- 6) 分娩介助の基本は余計な事をしない待ちの姿勢が基本。
子牛が生まれぬ時は産道に静かに手を入れ、子牛の状態を確認しましょう。問題がなければ、陣痛に合わせて、無理なく引っ張ります。しかし、破水後2時間以上、産道内に子牛がいる状態が続くと次のような症状で、介助が遅れると色々な事故が発生する可能性が増します。

- ①母牛は体力を消耗します。→産後のいろいろな疾病!!
- ②子牛により産道のすぐ横を走る神経が圧迫されます。→起立不能、ナックル!!
- ③子牛が酸欠状態になります。→虚弱、死産!!

■もう一口食べると、もう食わないの積み重ね

- 1) 誰しも良く食べる最高粗飼料が(できれば安く)給与出来れば良いと思っておられることでしょう。しかし、購入粗飼料は工業製品ではなく農業製品

です。最高グレードを買っても基本的にそれはその年度の最高級品という意味であるし、スタック・ロット・コンテナ・コンテナ内部・パックにより・パック内部でもバラつきがあります。丁寧に牛を飼養される方ほど、良い最上級の粗飼料を給与し続けようとする傾向が多くなるように感じます。しかし、自然から得る農業製品で最高品質の物を得続けるということは不可能と想います。普段購入する粗飼料を『今、良い品質の物が欲しいのに』という時に普段どおり若しくは普段以上の品質で入手するのは不可能に近いです。しかし、上級や2番手くらいの粗飼料で普段の飼養管理をされていると困った時にはいつでも最上級に逃げる事ができます。また、実際上級や2番手くらいのグレードというのは選択の幅も広く、価格も随分とリーズナブルなことが多いです。

- 2) 牛は違う物が来ると余程まずい物でなければとあえず少しは食べてみるという癖があります。同じ種類の粗飼料でも違うロットを持っていると、食べる食べない自体でリスクを分散できる上に、通常の給与を行う時でも、1日1回違うロットを少量給与した分(例えばたった0.3Kgかもしれません)は今まで食べなかった分以上に食べさせることができる場合が多々あります。この少しづつの積み重ねが乾乳期や産褥期の牛に対しては重要になります。
- 3) 繰り返しますが牛は基本的に「習慣の動物」です。手持ちの粗飼料がほぼ『0』になってから次を入手するのではなく、必ずある程度の量を残して並行利用を行うようにして下さい。これは『絶対大当たり!!』というロットが手持ちにある時は産褥期や調子の悪い牛用にキープしながら使う事は重要です。

広酪の生乳出荷組合員は、170余名であります。もし1戸あたりで1年1頭の乳用牛死産が生じなかった場合の生産乳量の影響は大きいと考えます(170戸×7,500Kg/頭としても1,275t)。このことは乳用牛頭数の分母が減ってないので来年も多いことになります。ここから産まれる後継牛やF1も多いことになりこれに関わる収入も大きくなります。メガファーム1戸と多くのお金が生まれることになります。まず、1頭・1頭死なない、死なせない夏からはじめましょう。